

近代文化研究所所員勉強会（平成 26 年度）要旨

第 1 回 平成 26 年 6 月 25 日

「ステンドグラスの技法から見た歴史とその魅力」

株式会社松本ステインドグラス製作所 松本 一郎

ガラスおよびステンドグラスの起源、主に近代日本におけるステンドグラスの制作と技法の変遷につき、表、写真、図面などを紹介しながら、製作者の立場から具体的に説明した。

エジプトで発見されたガラス片が紀元前 5500 年頃のもので最古のガラスとされている。そこから紀元前 3000 年頃までの記録はなく、5 世紀ごろには板ガラスが制作され、吹きガラス回転や遠心力を用いた円形状のロンデルなどへと発展した。ドイツのロルシュ修道院にあるキリスト頭部を模った作品が最古の焼き付けだとされる。原型をとどめる最古のステンドグラスはドイツのアウグスブルク大聖堂にある。

ヨーロッパでのステンドグラスの発展はキリスト教と切り離せない。12 世紀頃になるとリブヴォールトが発達し、壁面を高く、広くとれるようになり、フレスコ画などとともにステンドグラスは光（神）の宿る場所、崇高な場所となっていく。アメリカにはアール・ヌーヴォーの第一人者 L.C. ティファニーの芸術作品が多く残されている。

日本でも明治以降、西洋建築にステンドグラスが制作された。明治 19 年に東京に官庁建築を設計するために来日したドイツ人建築家ベックマンの帰国に伴い、宇野澤（山本）辰雄はベックマン貸費生として渡独した。宇野澤はベルリンでステンドグラスの技術を学び、帰国後、ステンドグラス工場を設立した。松本ステインドグラス製作所の創業者松本三郎は、15 歳の時、この宇野澤ステインド硝子製作所に入所、昭和 12 年に竣工した国会議事堂制作に従事した。制作期間 10 年、1872 枚、約 1000 m² のステンドグラスが設置され、宇野澤ステインド硝子工場が衆議院を、別府ステインド硝子製作所と東京瑠光社が参議院を担当した。宇野澤ステインド硝子製作所はしかし、第二次世界大戦中に相次いで職人が離散し、工場も空襲で全焼したため、戦後は再興されなかった。松本三郎は昭和 21 年、現住所の中央区日本橋浜町に株式会社松本ステインドグラス製作所を興した。平成 26 年で創業 68 年を迎える。当製作所では国宝、重要文化財そのほかのステンドグラスの修復にあたるほか、出雲大社神楽殿、東京ディズニーランド、青山学院ガウチャー記念礼拝堂、個人邸などへの制作納入実績を持つ。

工程は「原図作成」「原図カット」「ガラスカット」「鉛線圧延」「鉛線組み」「ハンダ付け」「洗浄」「パテ詰め」「補強」「洗浄」「メッキ」「洗浄」であるが、それぞれの工程における工具、技法、工法、材料は、戦前と戦後では異なる。

松本ステインドグラス製作所は、目線で見るとステンドグラスを意識した美しい外観と世界最高水準の強度安全性を備えた作品の制作を目指し、以下の独自の技術を開発し実践している。

- ① ガラスカット面に矢床でガリを入れることで接着力を強固にする。
- ② 鉛線結合部は端を削り差し込み工法で芯まで一体化させることにより、自重と振動によるステンドグラスの湾曲で亀裂が生じ鉛線が切断されることを防ぐ。
- ③ 鉛線表面をすべて半田で覆い鉛の酸化による劣化を防ぐ。（難易度が高く手間もコストもかかる技術。）
- ④ 白パテ＋黒ニス＋光明丹（錆止め）をボイル油で練って用いる。錆を防止し、接着性を高める。
- ⑤ 硫酸銅飽和水溶液を用い、銀色の鉛を黒くメッキする。硫酸銅は表面の半田に含まれる錫（Zn）のみに反応し、表面に銅被膜を作る。酸化、錆などを表面で防止することで内部酸化を防ぎ劣化から守る。
- ⑥ 洗浄を 3 回行い余分の油分を除去、美しく仕上げる。

創業以来の技術と経験を活かし、いっそう魅力的で耐久性のあるステンドグラスの制作を続けたい。

第 2 回 平成 26 年 7 月 30 日

「日本近代における詩歌と飲食」

国士舘大学教授 原田 信男

古来、日本においては、儒教的禁欲主義から、食べ物の話をするのは賤しいこととみなされてきた。しかしいっぽうで、近世後期には食を遊びとして楽しみ尽くすという文化も存在した。そうした伝統のなかで、近代日本においては、ブリア・サバランのような美食文学なるものは根付きにくかったが、人間の喜怒哀楽を直接のベースとする詩歌においては、さまざまな形で飲食が謳われてきた。本報告では、はじめ飲食を歌うことに否定的であったが、のちに肯定的に捉えるようになった歌人・斎藤史をはじめ、西洋近代の飲食に憧れつつも、やがては東洋の恬淡に回帰した詩人・北原白秋や、食に固執した歌人・斎藤茂吉と俳人・正岡子規などに着目した。ま

た詩歌という短詩型文学が、飲食をどのように効果的に扱い、微妙な心的内面の表現に成功しているかについて、詩人・佐藤春夫や川柳作者・時実新子の事例を挙げるとともに、食べ物の持つ生々しさを見事な隠喩として駆使し得た歌人・塚本邦雄の作品をとりあげた。このほか詩歌という表現のなかに、食べるあるいは料理ということの本質を見事に結実させたケースとして俳人・長谷川權と詩人・長田弘の作品を見た。さらに食の抱える社会性を扱った俳人・秋元不死男や農民詩人・真壁仁の場合や、若い感性として食と恋愛の關係に注目した歌人・俵万智などにも眼を向け、全体として十五のテーマを設けて、作家たちが、どのように飲食を表現したのかを、さまざまな事例を挙げて検証し、その時代的意義を考えた。

第3回 平成26年11月26日

「日本化しない中国：国民党政権の新生活運動」

中央大学経済学部教授 深町 英夫

1934年に蒋介石は新生活運動を発動し、「我々が今、国家を救済し民族を復興させる道理は、『日々の衣食』『日常茶飯』の中にこそあり、『日々の衣食』『日常茶飯』からこそ始めねばならない」と唱えた。この運動の基本文献である「新生活須知」は、「ボタンをきちんと留めること」「痰を吐くな」といった、きわめて微細な日常生活上の衣食住行をめぐる95項目の規則から成る。

この頃に蒋介石は、「今日の私は、幼年時代に父母の家庭教育により鍛錬され、青年時代に日本の軍事教育により琢磨され、壮年時代に総理の革命教育により陶冶されて、でき上がったのである」と述べていた。青年時代に日本へ留学した彼の日常生活を律することになったのは、陸軍士官学校予備校の振武学校では「斎房条規」、実習を受けた野砲兵第19連隊では「軍隊内務書」である。

当時の日本では、ドイツから最先端の細菌学・衛生学の知見を持ち帰った森林太郎（鷗外）が、「陸軍衛生教程」を執筆して軍隊における衛生知識の普及を図る一方、「衛生唱歌」に代表される一般民衆向けの啓蒙活動も行なわれていた。蒋介石が接触したのは、このような近代国家形成期の日本における、国民創出の一環としての生活習慣改善運動だったのである。

ほぼ同じ頃に日本へ留学し、やはり振武学校や陸軍士官学校に学んだ閻錫山も、日本社会の規律・公德に強い印象を受け、帰国後に辛亥革命を経て山西省の支配者となると、省民に対する生活習慣の啓蒙運動を実施している。これと軌を一にする蒋介石の新生活運動も、日常生活における秩序・衛生の追求という「身体近代化」により、勤勉・健康な近代「国民」を創出し、さらには国家の経済的・軍事的潜在力の最大化を企図した運動であった。そして、このような上から下へ向かう社会の「軍事化」において、模範となったのが日本だったのである。

しかし、国家権力を背景とした日常生活上に対する監視・統制に対して、一般民衆は面従腹背の態度を持って応えた。運動開始から2年を経た1936年に蒋介石は、「我々は今、いたる所で新生活運動の標語を目にするが、新生活運動の効果を目にすることは少ない。……往々にして視察する者に出くわせば、その時だけことのほか緊張するのだが、立ち去ってしまえばすぐに気を弛めてしまい、だれも咎め立てしない。あるいは気づかれやすい場所では、整然・清潔に注意するのだが、いくらか目につきにくい場所では、真面目に実行しようとしな」と嘆息している。その翌年に日中全面戦争が勃発すると彼は、「倭寇は組織化された国家で、全国に動員をかければあらゆる者が戦争において役割を発揮できる。だが、我々は組織化されていない国家で、あらゆる事は一人で敵国の全体に当たらねばならない。これを恐れずにいられようか」と、日記に記さざるをえなかったのである。

第4回 平成27年2月18日

「近代日本における紳士の礼装規範の形成」

宇都宮大学、放送大学非常勤講師 小山 直子

発表では主に男性の洋服による礼装規範の形成に関して取り上げた。拙稿（博士論文）「礼装規範の形成と近代日本」では、明治から昭和において礼装とされた衣服形態を抽出して公文書や記事に検証し、男子の洋服による礼装規範の形成が国民国家の形成に呼応したのに対し、男子の紋付羽織袴や女子の白襟紋付という和服礼装は、国家から正式に認められない中で国民的礼装として普及したことを論じたが、本発表はそれに基づいている。

まず、これまで見過ごされてきた「通常礼服」と「通常服」という公文書の用語に着目し、礼装規範と国家体制との連動という枠組を見出した経緯を述べた。明治5年の太政官布告により男子全てに対し「通常礼服」（図示された形態は燕尾服）が制定され、続いて明治10年には西洋習俗に合わせようと、昼間の宮中参内用の服装としてフロックコート着用が通常礼服の「換用」として官吏に許された。明治21年には宮内省により宮中参内時の服装指定として「通常礼服は燕尾服、通常服はフロックコート」を意味する旨の達が出されている。これ以

降二つの用語が近代日本の礼装規範の枠組をなしていく。

次に、フロックコートにシルクハット姿が一般の紳士においても普及した理由について検証結果を述べた。明治30年代後半に西欧の紳士服の流行はモーニングコートや背広、山高帽という寛いだ服装に移行し、フロックコートにシルクハットは凋落するが、日本ではむしろこの頃からフロックコートにシルクハット姿の紳士が増す。何故か。その着用動機には西洋文化への追従というよりはむしろ、国家の服装規定の享受という面が見出せた。国家行事の臨席者の服装指定は政府ではなく宮内省の管轄下にあった。行幸が伴う各地の行事でも「通常服と黒高帽」が宮内省により指導徹底されたが、参加資格者は宮中に繋がる服装を喜んで調達する現場があった。このような着用動機がフロックコートにシルクハット姿の紳士の蔓延につながったのである。

ちなみに、フロックコート（通常服）にはシルクハット（黒高帽）でなければならないという指導徹底が昭和初期までなされた理由としては、明治5年の通常礼服の制定時に礼帽としてシルクハットが想定されていたことに加えて、当時、燕尾服やフロックコートにはシルクハット（漢字では黒高帽・絹帽・礼帽・高帽）を組み合わせるのが西洋流儀に適った正しい形であるとした決定事項を厳守しようとした宮内省の姿勢があげられる。「山高帽」と称されるフェルト製の帽との組み合わせは論外であったのである。世間ではフロックコートに山高帽を組み合わせる日本独自の形が愛用されていくなかで、国家行事での服装規定が変わらずにあったことから、シルクハットには宮中につらなる表象が強く刻印されていたと考える。「シルクハット」と「山高帽」の使い分けの決定子はそこに存在したのである。

最後に、宮中への参内が可能な「通常礼服」や「通常服」に指定されることなく、国家的に「冷遇」された地位に有り続けた紋付羽織袴の社会的地位について簡単に紹介した。

第5回 平成27年3月18日

『上海日日新聞』の文学・映画・演劇情報を読む ― 1931年～1937年の上海日本人社会

聖心女子大学非常勤講師 宮内 淳子

戦前の上海には、虹口地区を中心に多くの日本人居留民がおり、1907（明治40）年に6200名余りだったものが1914（大正3）年には1万1千人を越えた。ここで読まれた日本語の新聞は何紙かあるが、第二次上海事変が起きた1937（昭和12）年までに区切って、『上海日日新聞』の文芸欄、映画・演劇情報などを紹介する。

『上海日日新聞』の発行は1914年から1937年10月までであるが、日本で読めるものは限られている。丸善よりDVDで発売（2013）された『上海日日新聞』は、1931年1～8月、1933年5月～1937年4月である。創始者の宮地貫道は宮崎滔天と親交があり、創刊当時は日中関係の信念を社説で語ったりしたようだが、現存するものは、現在の新聞と大きな違いのない紙面作りで、際立った主張も見られない。文化に限って言えば、自国中心の報道であり、内地の話題も多い。

文芸欄に大きな扱いで載る小説は日本在住作家のものが多く、上海独自の文学者を育てる動きは見られない。連載小説の中に柳雨村のものもあったが、「百米モダン銀座」というこの小説は日本語で書かれている。日本敗戦後、柳雨村は漢奸として裁かれることになる。中国文学への目配りが感じられない中で、魯迅の扱いは別格であった。その死（1936年10月19日）と葬儀の様子を連日報じ、日本から佐藤春夫や新居格らの悼む言葉が寄せられた。

だが、こうした例は少ない。映画広告や映画紹介も、中国映画の話題はほとんど見られない。日本映画か、アメリカ及びヨーロッパ映画がもてはやされている。これは日本人居留民の生活圏に限られ、ほとんどの日本人が中国語を解さず、日本人社会以外の世界に関心を持っていないことを示す。記事にはしばしば上海神社の祭礼や催し物が報じられ、神社を心の拠り所にする居留民たちの生活が垣間見られる。

英語や仏語の新聞の情報を見れば、共同租界やフランス租界にさまざまな映画、演劇があり、日本語新聞の報道とは違う文化が展開していることがわかる。1930年代では、日本映画も中国映画も、同時期にアメリカやヨーロッパの方向を向いており、互いに交流を深めることはなかった。それは演劇においても同じである。居留民が多く暮らす虹口地区には内地から浪曲や文楽、歌舞伎といった興行が多くやってきて新聞もにぎやかに書き立てたが、京劇が話題になることはなかった。

日中戦争が始まると『上海日日新聞』は発行停止となり、1939年には国策を押し出す『大陸新報』が創刊される。そこまで来る前の文化交流がもう少しあれば、という感を抱くが、同質性を目指す日本文化の一面を示すともいえる。